資質・能力の育成を目指す「検索」

ー「課題の設定」における新聞記事データベースの活用事例ー

田中　洋美

＜抄　録＞

今，何故，新聞記事データベースで検索するのか。急速に発達する情報化社会を生き抜くためには，情報の扱い方を熟知するとともに得た情報を自らの考えの形成に役立てる力が必要である。今回は課題の設定における新聞記事検索の課題を取り上げる。レポートの「問い」を立てるための基礎調査とディベートの論題を検討する事例を通して，主体的に探究するために必要な資質・能力を育成する指導の在り方について考える。

＜キーワード＞

検索，学習の過程，課題の設定，資質・能力の育成

1　はじめに　ー学びの中心に図書館がある学園ー

本学園は創立114年を迎えた。約1,800人の女子が同じ校舎で学ぶ中高一貫校である。

「高・中図書館」は文字通り敷地の中心にあり，生徒が登校して教室に行く際，必ず目にするおなじみの図書館だ。中庭まで見通せる開放的な空間に，壁面にそった小説の書棚，新刊やおすすめの本が並ぶ展示書架など読書を楽しむ空間と，分類番号順に並ぶ書棚を挟んで設けられた学習スペースが融合されている。２クラス利用できる学習スペースは，教科のみならずHRや総合的な学習，行事や海外研修の事前学習で利用している。この明るい学びの空間へ，日常的に生徒が足を運ぶ姿が本学の図書館の特徴だ。

また，蔵書10万冊を中心とした豊富な資料に加え，データベースが充実している。学内データベースの拡充は2006年度～2008年度に進められ，百科事典（「ポプラディアネット」と「ジャパンナレッジ」）と新聞記事データベース（「朝日けんさくくん」，「ヨミダスforスクール」，「日経テレコン」）が備わる。

では，このデータベースはどれぐらい活用されているのか。まず，利用時間を見てみよう。『平成30年度図書館報告』によれば，図書館を利用する授業は中高合わせて年間464時間である。その内，データベースの利用は327時間あり，70.4%を占める。また，新聞記事データベースを利用する授業は113時間であり，約25%が新聞記事を伴う課題を行っていることがわかる。

次に，どのような目的でデータベースを利用するのか。本学の図書館の利用申込書には「授業内容」とともに「目的」を問う項目がある。すなわち「テーマ設定」「調査」「研究」「課題の作成」「発表」等だ。同じ課題でも，どこに重点をおくかを司書に伝えることで資料紹介や配置の提案など的確な助言を得られることも多い。

この「目的」の並びは「探究のプロセス」（①課題の設定，②情報の収集，③整理・分析，④まとめ・表現）（＊１）と重なる。次期学習指導要領では，国語においても学習の過程の明確化を図る。例えば，「書くこと」では「題材の設定」「情報の収集」「内容の検討」「構成の検討」「考えの形成」「記述」「推敲」「共有」という学習の過程が設定されている（＊２）。

今回，「課題の設定」（利用目的では「テーマ設定」）の過程において新聞記事データベースを利用した実践を２例挙げる。事例１では検索時の躓きに対する工夫，事例２では思考を広げる検索について取り上げる。

2　事例１　高３現代文B「モノ・レポート」（2/10時間）

本単元は，日用品を取り上げ，さまざまな観点から社会とのかかわりや日常生活について考察する。「書くこと」の一連の学習過程を通して行い，レポートを書くスキルを習得することを目標とする。

図書館では，取り上げる日用品についての基本的な情報を得，レポートの問いを立てる下準備を行う。基礎調査はKWLチャートを用い，４つの観点（①起源・変遷，②製法・材質，③デザイン，④用途）についてまず「ジャパンナレッジ」の辞書類で定義と基礎的な情報を集める。次に，新聞記事データベースを活用して話題となった記事などを収集する。複数の新聞を検索することで地方版でしか得られない情報の存在や同じ話題でも取り上げ方の違いなど比較検討することを狙う。

ところで，実際に調べるとき躓くのが検索語だ。さまざまな検索方法は，入学時にメディアオリエンテーションで実習し，教科や総合的な学習などさまざまな機会で実践している。

TANAKA, Hiromi：私立椙山女学園高等学校（愛知県名古屋市千種区山添町２丁目２番地）

しかし，思わず「激落ちくん」と入れてしまう生徒もいる。もちろん辞書では出てこない。これは商品名からモノの名「メラミンスポンジ」「スポンジ」に置き換える必要がある。Web検索で思いついたまま入力することに慣れている生徒には，予め検索語の候補を考えさせている。国会図書館の「リサーチ・ナビ」でキーワードや関係分野を知ることも有効だ。班で話合いながら上位語・下位語や分類の大小を考えるなかで，語の意味範囲や概念を理解していく。

新聞記事検索では，商品名で検索するとよほどの話題の品でないかぎりなかなか出てこない。一方，最適な検索語を見出せれば，新聞記事ならではの情報を活用できる。例えば，「朝日けんさくくん」では，本文ページから切抜き画像に切り替えが容易で，製造過程や構造の図解，実物の写真などの視覚資料が得られる。

このように調べる目的を明確にして，検索語を選択する過程で必要な語彙を得て，より的確な検索ができる。新聞記事データベースの検索は，言葉の見方・考え方を広げ，柔軟な発想を生む過程でもある。

写真１「論題を磨こう」授業風景

3　事例２　高３国語表現「論題を磨こう」（2/8時間）

ディベートの論題案について基礎調査し，論題を的確に理解するとともに定義，条件を設定する単元である。

前年度までの取り組みで情報活用や論題の理解に次のような課題があった。

問題点①　Web検索で得た資料を活用するが，論拠が示されない著者がどのような立場かが不明等，情報の信頼性・妥当性に問題がある。

問題点②　官庁のデータからの引用では，根拠は示せても理由付けができない。これにはデータや事例と理由付けの例示の必要性を感じた。

問題点③　話合いでは話が噛み合わない。まず，論題に関する情報が共有できていない。社会的な問題では，立場や状況によって大きくものの見方や意見が異なる場合がある。参加者全員が知見をもちよって「何が問題なのか」を確認する作業が必要である。

そこで，問題①，②の改善案として，今年度は各班（４人班）に新聞記事調査担当を配置した。するとメリット・デメリットについて，それぞれどの媒体で調べればよいかを話し合い分担し始めた。新聞記事調査は事件や事例の収集を主に担当する。「朝日けんさくくん」では，まず「見出し」が並ぶ。その時点で当たりをつけつつ，スキミングして要点を捉える。検索の過程で最近のものだけでなく10年前と比較するなど１つの話題で遡及したり，対比したりと検討の視点が増えた。

さらに「朝日けんさくくん」には，通常の記事検索と並んでクリックで検索のできる「ナビ検索」のインターフェースがある。例えば，事例調査のなかで対立する意見を見出し，さらに他の見方を得たいときに便利だ。まず「政治・経済」「教育」など紙面と同じ分類があり，続いて社説，コラム，読者の投稿といったコーナーを選ぶことができる。ここは「誰の」「どのような立場で」「どのような場で」の発言が要るのかを考えて検索する必要が生じる。

最後に問題③については，賛否の立場を決定するタイミングを変更した。４人班での調べが終わり，論題が同じ合同班で収集した情報の報告したのち，じゃんけんで決めた。すると，調査段階では賛否にかかわらず幅広く情報収集しながら，論題とどうかかわるかを話し合い，得た情報の価値づけを行う姿が確認できた。合同班で自分が得た情報を話しながら，定義や条件を確定していくことで，話題に対する共通理解が深まった。本時のふりかえりで，ある生徒は「『朝日けんさくくん』を使い，自分の意見を明確なものにするための資料をうまく集めることができた。他にも友達の意見を踏まえ，自分の主張と照らし合わせることで幅広い視点から考えることができた。」と記している。

4　おわりに

今後も目的を明確にした新聞記事検索を通じて主体的に探究する学習の基盤を作っていきたい。生徒が主体的に取り組むためには，まず課題が「自分のもの」でなくてはならない。新聞記事データベースの検索は自分が本当に知りたいことを言葉で探り当てていく作業でもある。生徒自身の「知りたい」ことの幅を広げ，さらに社会に目を開いてくれる「朝日けんさくくん」を，次はどの学習の過程で活用できるのか模索している。

【参考文献】

＊１　文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説　総合的な探究の時間編』 P6

＊２　文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説　国語編』p48